

## 道外からの医師確保

美幌医師会 理事  
美幌町立国民健康保険病院 循環器内科部長  
松井 寛輔

「医療崩壊」を根本的に解決しようとするなら、「終末期医療のありかた」「医師派遣の制度化」「医療保険と病院経営」など「日本の将来の医療をどう構築するか」という国家レベルの問題になるため、長いスタンスの学問的審議と政治的実行力が不可欠です。それなくしては結局のところ一時的な解決にしかならない状況に思えます。ところが、いまの日本の政治状況では、その解決がいつ実現できるのかまったく期待が持てません。そこで、まず地域の「医療崩壊」を防ぐ妙案を現場のわれわれで考えよう、というのが今回の趣旨と受けとめ、姑息的ではありますが私なりに考えた「医師を確保できるかもしれない方法」を挙げてみます。

2年半前、私は九州から道東の美幌町へ赴任してきました。美幌町は農業を主要産業とした人口約21,000人の町です。65歳以上の人口は27.8%と高齢化が進み、さらにこの20年で約4,000人の人口が減少しています。この町の医療施設は、私の勤務している美幌町立国民健康保険病院（一般病床99床）と美幌療育病院（重度心身障害児（者）病床120床、療養（一般）病床30床）の2つが有床で、その他に8つの無床診療所があります。

かつて、美幌町立国民健康保険病院は内科と外科・小児科・整形外科・産婦人科・眼科の合計6つの診療科に8名の常勤医師がおりました。その後、整形外科と産婦人科は閉鎖。眼科は出張医師による外来診察のみ、に縮小を余儀なくされ、常勤医師も5名に減少したままでした。ところが平成22年に私を含めて2名、平成23年、平成24年にはそれぞれ1名の医師が新たに常勤として加わり、現在、常勤医師は9名に回復しました。

医局派遣が打ち切られ、医師確保が困難といわれるこの時代に当院ではなぜ医師を増やすことができたのでしょうか。その答えはインターネットでの医師公募です。しかも、その最初の応募者の一人が私でした。私と同様、インターネットで応募し当院へ赴任してきた医師は全員が道外からで、かつ北海道の自然が好きでやってきました。もちろん、近年、道内の病院でインターネット公募している病院は少なくありません。では、その中からあえて当院を選んだ理由は何だったのでしょうか。これが最も重要なポイントです。

第一に、「交通の利便性」です。美幌町から女満別空港までは、車でわずか10分です。すなわち、美幌

町の自宅から2時間もあれば東京まで行けるわけです。学会への参加も容易ですし、自宅が東京にあっても時間が許せば月に数回は帰れます。冬期、道路状況の不安定な北海道では、交通の利便性は医師が勤務先を選択する際に最も重視するところです。

第二に、地方病院に勤務する医師として心配なことは、高度医療が必要な救急患者が来院した場合、地域内で対応が可能か、という点です。美幌町は、救急車なら約30分で北見市や網走市の2次3次救急医療病院へ搬送できます。救急搬送可能圏内に中核病院が存在し、気象に左右されるドクターヘリやドクタージェットを頼らずに済むことは医療サイドにとって重要です。

第三は、医師が北海道の地方へ赴任する目的です。私は、阿寒国立公園や知床国立公園の雄大な自然のなかで生活するのが長年の夢でしたので、どちらにもアクセスのよい美幌町を選びました。空港が近くになくとも、地域の特性をセールスポイントに掲げてみてはどうでしょうか。大雪山系に近ければ「山好き」が集まるでしょうし、近くに大きなスキー場があればそれに魅力を感じる人もいるでしょう。私が北海道に来て一番意外だったことは、道外の人々を深く感動させる美しい自然や雪景色が、地元ではあたり前すぎ、ほとんどの人がその良さに気付いていないことです。「へき地の病院」を掲げるのではなく、「雄大な自然の中で自分の人生をエンジョイしながら医師として働くことのできる病院」というプラスイメージで宣伝すべきでしょう。今、この時代だからこそ、このような生き方を求めている人は医師に限らず少なくないはずです。

若い時からへき地医療のスペシャリストを育成することも重要ですが、それには一定の年数を要します。そんなに待てない地方の病院に、今すぐ来てくれそうな世代を考えると、①子供が小さく教育環境より自然環境を重視する人たち、②子供が大学に入り親元から離れて行った世代の勤務医、③定年退職後も勤務意欲のある人などで、これらの医師の中で、北海道に興味のある人に声をかけるのが効果的でしょう。独身者であれば世代に関係なく赴任可能と思われます。

一方、インターネット公募にも応募者の「人間性」を知る機会が限られる、という短所があります。しかし、医師を受け入れるのみで選択の余地もなかった頃を思えば、状況はむしろプラスに変化していると考えてよいのではないのでしょうか。インターネットという大きな力を利用して日本中の医師達の関心を北海道へ集めることができれば、大きな変化につながることを期待できます。道内のみならず道外にも目を向けてこそ、今後の医師確保の可能性があるのではないのでしょうか。